

特集 Inter BEE 2020 ONLINEの注目レポート

Inter BEE 2020は完全オンラインで11月18日～20日の3日間行われた。

そこで行われたFORUMや出展者セミナーなどから、注目した提案やメッセージをレポートする。やはり何と言っても、コロナ禍に対応したリモート制作など、IPソリューションを生かした提案が増えた。なかでも3回目を迎えた「IP PAVILION」では、斬新な取り組みが話題となった。本誌で活躍するメディアウォッチャー・高瀬徹朗氏の「カンファレンス聞き倒しレポート」も読みごたえあり。（編集部）

慶應義塾大学 村井純教授インタビュー 向かうべき「放送とネット」の役割と 制度の在り方

1984年、電話回線で日本初のコンピュータネットワーク「JUNET」を立ち上げた村井教授。JUNETは日本のインターネットの起源とされ、「日本のインターネットの父」と呼ばれて久しい。菅政権では、内閣官房参与としてデジタル改革の基本方針づくりワーキンググループの座長を担う。かつて村井先生は、日本の放送史に残るアナログ完全停波を実行した推進組織の座長として陣頭に立ち、放送のデジタルトランスフォーメーション（DX）を2011年7月にやり切った方だ。それから10年が過ぎる中、HTML5の標準化やIP技術の進化が展開し、さらにCOVID-19がもたらした「インフォデミック」という情報の在り方も問われる中、向かうべき放送とネットの役割や制度の在り方を聞いた。

（構成：吉井 勇・本誌編集部）

テレビ「アナログ停波」に至る 現場の記録が残っていない

—— 10月のCEATEC、11月のInter BEEという日本を代表するコンベンションで村井先生は基調講演し、2011年7月の地上テレビ放送「アナログ停波」を日本のDX成功事例として紹介された。

村井 アナログ停波は法律（2001年の電波法改正）で決めたデッドラインのあるトランジションで、これを実行するため総務省情報通信審議会の下に、「地上デジタル放送推進に関する検討委員会」が2003年度に立ち上がった。座長就任を要請されたが、「国民にテ

レビ全部を買い替える」という目標に対して躊躇した記憶がある。それほど難しい事業だと思った。

—— 2003年度から8年間、座長としてリードされた考えは何か。

村井 この検討会には、放送事業者をはじめ機器ベンダー、権利者、通信事業者、インターネット関係者、そして視聴者とあらゆるステークホルダーが集まり、省内の会議室では入り切らないほどだった（笑）。すべての立場の言い分を丹念に聞いたことが大きかったと思う。8年間で総理大臣は7人、政権は1度変わったが、一度決めたらやり抜くという皆さんの決意と根性



©川津貴信

慶應義塾大学 **村井 純 教授**

が推進力だったのではないかと。

—— やり切れたのは、なぜだと思うか。

村井 テレビ放送が国民から信頼されていたから、に尽きる。「テレビが見えなくなると大変だ」と、最後はお年寄りのサポートにボランティアで走りまわったほどだった。